

アメリカ合衆国地方私立大学における音楽科教員養成

—— インディアナポリス大学での調査をもとに ——

菅 裕

A Report of Music Teacher Training in a Provincial Private University in USA

— Observations at the University of Indianapolis —

Hiroshi SUGA

要 旨

平成15年2月から3月にかけて、宮崎大学学長裁量経費により、アメリカ合衆国インディアナポリス大学に滞在し、音楽科教員養成カリキュラムについて調査する機会を得た。本稿ではこの調査についての報告をもとに、今後のわが国における音楽科教員養成カリキュラム改善のための方策について提言している。具体的提言は、1. 一貫した理念に基づく明確な目標設定とその共通理解をはかること 2. リサイクルを中核とする実践的カリキュラムの開発 3. 学生のリフレクティブな思考の促進の3点である。

1 はじめに

教育職員養成審議会は、1997年からの3次にわたる答申のなかで、従来の大学の教職課程の問題として次の4点を上げている¹⁾。

1. 教科の専門性が過度に重視されている。
2. 教職課程における開設授業科目の間で内容の整合性・連続性が考慮されていない。
3. 大学がどのような教員を養成するかという哲学や理念を持っていない。
4. 学生の課題探求能力を育成する教育が十分行われていない。

さらに、今後の教職課程の充実のために「それぞれの大学が養成しようとする教員像を明確に持ち、それを達成するための組織を構成してカリキュラムを編成すること」「教員養成に携わる大学教員は、自分の専門の授業と教員養成とのかかわりを考えた授業を行っていくこと、学生が課題探求能力を身に付けることができる授業を行っていくこと」などを求めている。教

員養成大学、特に地方の教員養成を担う大学にとって、これらの要請に答えるための新しい教員養成カリキュラムの開発は急務であるといえる。

筆者は、平成15年2月から3月にかけて、宮崎大学学長裁量経費により、アメリカ合衆国インディアナポリス大学（以下イ大とする）に滞在し、音楽科教員養成カリキュラムについて調査する機会を得た。

現在アメリカの地方音楽科教員養成もわが国と同様に改革が求められており、その改革の方向性はわが国の改革に対して重要な示唆を与えるものである²。本稿ではこの調査についての報告をもとに、今後のわが国における音楽科教員養成カリキュラム改善のための方策について提言する。

2 インディアナポリス大学の概要

イ大は、1902年に創立されたメソジスト教会系の私立大学である。学生数は、学部学生・大学院生を合わせて約5000名であるから、宮崎大学とほぼ同規模の大学であるといえる。学部は、教養科学、ビジネス、教育などの9つの専門課程に分かれている。このうち音楽教育専攻学生は、教養科学（School of Arts and Science）内の音楽科（Music Department）に所属している。イ大の理念（philosophy）は、次のように定義されている。

イ大は、学生に対し、複雑化し、急速に変化する世界のなかで生きるための力を準備しようと望んでいる。この目的のために、大学のカリキュラムは、知的、身体的、倫理的そして精神的側面を含む、全人的な発達をめざす。このカリキュラムは、学習とは生涯を通じた活動であるとのキリスト教の価値観を反映するものである。従って、批判的・合理的思考、自立した、責任ある探求、高貴で創造的な表現、鋭敏で反省的な倫理性を重視する。学生の個性を尊重しつつ、大学は、意味ある生活を可能にする力と、そのような生活が個人的社会的責任と不可分であることを認識できる知性とを学生のなかで養成するべく努める³。

抽象的な理念のみならず、学生に対しどのような価値観に基づいて教育を行い、何を提供するのかということが具体的に書かれている。

さらにイ大では、各専門課程の理念も明確に定義されている、音楽科の理念と使命を次に紹介する。

すべての社会の創始期から存在する芸術は、人間的条件の基礎であると言われている。それらは普遍的な人間感情を伝達し、西洋文明の偉大なる発達のなかで、輝かしい歴史を刻んでいる。この理解のもとに、イ大は、専攻・非専攻を問わずすべての学生に対し、講義やディスカッションそして様々な経験を通して芸術と出会い、この遺産を尊びより質の高い生活を享受する市民としての地位を保証しようとするものである。

音楽科は一般学生だけでなく、音楽的才能を持ち音楽や音楽関連領域での職業を追求しようとするものに対し、学部専攻プログラムを提供することを使命とする。最終的に、インディアナポリスのコミュニティに対し音楽の教育と、質の高い様々な種類の音楽の

演奏を聴く機会を提供することが我々の使命である。

人間生活における音楽の意義に対する理解に基づき、学生に対し質の高い生活を営む市民のための音楽的教養を保証することが、音楽科の使命として明確にされている。

さらに学生だけではなく、地域のコミュニティに対する貢献にも言及している。実際、イ大の音楽科内のホールでは、学生や音楽科の教員、あるいはゲスト音楽家によるコンサートが頻繁に催され、地域住民が気軽に足を運んで様々なジャンルの音楽を楽しんでいる。

3 イ大音楽科カリキュラム

次に掲げるのは、音楽教育を専攻する学生のためのカリキュラムである。

宮崎大学の中学校教育コース芸術・保健体育系教科教育専修（音楽）のカリキュラム表と比

（ ）内は単位数

	前 期	後 期
第 1 学 年	音楽フレッシュマンセミナー (1) 音楽基礎理論または初級理論 (3) 音楽文献概観 (2) 個人レッスン (2) 鍵盤楽器技能 (1) アンサンブル (0.5) 英作文 (3) 世界史 (3) 健康 (1)	音楽教育探求 (2) 音楽理論 (3) 世界文化における音楽 (3) 個人レッスン (2) 鍵盤楽器技能 (1) アンサンブル (3) 西洋文献と作文 (3) 音楽におけるマイクロコンピューター応用 (2)
第 2 学 年	発達・学習心理学、講義(4)とフィールド経験 (0.5) 音楽理論 (3) 音楽史と文献 I (2) 個人レッスン (2) ピアノレッスン (1) 打楽器技能 (器楽選択) または基礎打楽器／弦楽器技能 (声楽選択) (1) 上級英作文声楽技能 (1) アンサンブル (0.5)	多様な社会における教授 (3) 音楽理論 (3) 音楽史と文献 II (2) 個人レッスン (2) ピアノレッスン (1) 弦楽技能 (器楽選択) または基礎管楽器技能 (声楽選択) (1) 教室コミュニケーション (3) 基礎指揮法 (2) アンサンブル (0.5)

第 3 学 年	中学校における障害児教育 初級社会実践 (1) 音楽史と文献Ⅲ (2) 調的形式 (3) 金管楽器技能 (器楽選択) (1) 個人レッスン (2) ジャズ教授楽 (器楽選択) (2) 現代声楽スタイル (声楽選択) (1) 発声法Ⅰ (声楽選択) (2) アンサンブル (0.5) スペイン語と文化Ⅰ (4)	教育における社会的・政治的文脈 (3) 宗教 (3) リサイタル (0) 個人レッスン (2) 上級器楽指揮法Ⅰ (器楽選択) または上級 声楽指揮法Ⅰ (声楽選択) (1) 発声法Ⅱ (声楽選択) (2) アンサンブル (0.5) 化学/生物学 (3) 木管楽器技能 (器楽選択) (1)
夏 期	外国語Ⅱ (4)	
第 4 学 年	小学校音楽教授 (20時間のフィールド経験) (4) 器楽/声楽編曲 (2) 上級器楽指揮法Ⅱ (器楽選択) または上級 声楽指揮法Ⅱ (声楽選択) (1) 個人レッスン (2) リサイタル (0) マーチングバンド技能 (器楽選択) アンサ ンブル (0.5) 哲学 (3) 数学における発見 (3)	中等レベルまたは高等学校における教育実 習 (2回×8週間) (12) 教育セミナー (2) アンサンブル (0.5)

較すると、「教科に関する科目」の比重が非常に大きいことが分かる。また各種の指揮法や指導法など、音楽を指導することを学ぶ機会が非常に多い。つまりわが国の音楽科教員養成が、音楽的な知識・技能と「教えること」に関する知識・技能が別個に養成されているのに対し、アメリカでは教科の専門性と指導法とを統合的に扱い「音楽を教えること」についての研鑽をめざしているということがいえるだろう。

この中で特にリサイタルの実施が、他の演奏専攻の学生と同様に、音楽教育専攻の学生に対しても無単位必修としてカリキュラムのなかに位置づけられていることに注目したい。

このリサイタルの意義について、学生向けのハンドブックには次のように記されている。

リサイタルは学生の成長と達成を促進するだけでなく、進度についての相対的な評価を行うことを助ける。最終的に、リサイタルは聴衆に学習の機会を与え、演奏者と鑑賞者の双方のレパートリーを増やすことになる。

学生にはリサイタルの実施だけでなくリサイタルへの聴衆としての出席も義務づけられており、音楽家としての実技能力の達成度についての相互評価を含む演奏者と鑑賞者とのコミュニ

ケーションの機会としてリサイタルが位置づけられていることが分かる。

イ大でのリサイタル課題は、デパートメンタル・リサイタルとジュニア／シニアリサイタルの大きく二つに分かれている。

デパートメンタル・リサイタルは、各セメスターの終了間際に実施されるもので、全ての音楽科学生が対象となる。学生は一人1曲ずつを演奏する。演奏終了後に学生は、リサイタルでの演奏の様相を収録したビデオを視聴し、それに基づいて演奏経験についての反省とビデオテープについての短い批評を音楽科に提出することになっている。

これに対しジュニア／シニアリサイタルは、一人で一つのリサイタルを企画・演奏するものである。音楽教育専攻の学生には、25分～30分程度のハーフ・リサイタルが課せられている。

いずれのリサイタルでも口頭または記述によるプログラムノートの作成が非常に重視されている。ハンドブックにはプログラムノートの意義について次のように述べられている。

プログラムノートは、聴衆に対し、作品についての特徴を学び、それを演奏を楽しむことに結びつけていく機会を与える。4年間のカリキュラムを通して、音楽専攻者は、巨匠たちの手による様々なジャンルの作品の歴史的・様式的・理論的意義を学ぶだけでなく、様々な聴衆たちに、これらの音楽についての理解をどのように伝えるかということ学ぶ。

イ大の学生リサイタルは、学生にとって単に演奏技能の達成度評価の機会であるだけでなく、プログラムノートの作成を通じて、「音楽について語る」作法について学ぶ機会でもあるのだ。

4 授業の実際：「音楽教育探求」に参加して

授業の実際として、Jo Ann Domb 教授によるフレッシュマン（1年生）対象の「音楽教育探求」の様子を報告する。

Domb教授は、この授業の目的についてシラバスのなかで次のように述べている。

このコースの目的は、教育全体と音楽教育に寄与する領域を探求することである。その際、次の二つの帰結を念頭に置く。：1. 音楽教育を職業として考えているものに対し、主要な職業決定の基礎を与えること。2. 音楽教育を専攻として選んだものに対し、彼らが準備期間とその後の教室経験において出会うことになる領域への洞察を与えること。

一年生の後期という非常に早い段階に、音楽教育を職業とすることへの見通しを持たせることを目的としている授業が行われていることに驚かされる。授業の内容も、日本の学習指導要領に当たる国立音楽基準や音楽教育の哲学、音楽教育の心理学的基礎など、音楽教師に必要な理論的・実践的課題を網羅するものとなっている。この背景には、深刻化する音楽教員不足への対応が大学に早急に迫られていることと関連して、職業としての音楽教育の使命と意義を早い段階で学生に意識化させるねらいもあると考えられる。

授業は、週2回火曜日と木曜日に実施されている。火曜日の時間枠で学生は、教師とともに

大学近辺の小・中・高等学校を訪問し、そこで実施されている一般音楽、オーケストラ、バンド、合唱の授業を観察する。学生にはあらかじめ観察報告の課題が与えられており、学生は、その週の木曜日までに観察中に気づいたことをレポートにまとめて提出しなければならない。

木曜日の授業では、学生の観察に基づいて討論が行われる。指導教官の「教師は子どもたちの意欲を高めるためにどのような手だてを取っていたか」「そのことによって子どもはどう変わったか」などの具体的な質問をきっかけに、非常に密度の高い議論が展開されていた。

以上のように、この授業では実際の教育現場での音楽授業の中から具体的な教師の努力や工夫、子どもの抱える問題を発見し、それについて自分の考えをまとめ意見を交換する作業を通じて、1年生の学生に対し、「音楽教師に必要な資質とは何か」「そのために自分達はこれから何を学ばなければならないか」ということを繰り返し考えさせているのである。

日本の教員養成では、教育現場の観察の機会は教育実習に限られており、しかもその期間は大学の授業からは完全に切り離されることになる。そのため実際の授業観察から得た気づきを多様な視点から発展させ、理論化していく機会が十分に与えられていない。授業観察をもとに討論形式で進めていく「音楽授業探求」の授業スタイルを取り入れることには、今後十分に検討の価値がある。

5 ポートフォリオによる評価

イ大音楽科では、全ての学生にポートフォリオの保存と提出を課している。これは個人の学習過程を証明するため、あるいは学生の学習成果の到達点を証明するための学生の制作物のシステムティックなコレクションである。全ての音楽科学生は、3リングバインダーにプレゼンテーション・ポートフォリオを保存することが指示されている。これは第2学年評価の一部として中間期、そして卒業に先立つ最終セメスター期間に評価の対象となる。

このうち中間期ポートフォリオの内容としては次のものが指示されている。

- 現在の達成度についての自己評価を含むなぜその音楽職業を望んでいるかについて、そしてその職業への準備のためにこれからの2年間で何を学ぶ必要があるかについての短いエッセー。
- デパートメンタル・リサイタルにおける反省
- ピアノ熟達試験に合格したことの証明（ピアノ専攻者以外）
- オリジナルの作曲（理論クラスまたは作曲のレッスンで作曲されたもの）
- 歴史に関する小論文（音楽史クラスで書かれたもの）
- 授業「コンピューターの音楽への応用」で使用されるプロジェクト
- 世界音楽プロジェクト（世界音楽クラスで制作されたもの）
- デパートメンタル・リサイタルでの演奏のために書かれたプログラムノート
- ジャズと民族音楽を含む様々な文化的ソースからの音楽、20世紀を含む全ての音楽史の時代の音楽、そして様々なジャンルの音楽に関するコンサート批評
- 演奏の印刷されたプログラム：ソロとアンサンブル
- 音楽的活動の要約（音楽組織への参加、アンサンブルへの参加、受賞、奨学金、奉仕、音楽に関連するワークスタディ）

また最終ポートフォリオの内容としては次のものが指示されている。

- 中間期ポートフォリオの内容と学位プログラムにふさわしいレジュメ、そしてシニア・リサイタルのCD（学生はこのためのアレンジメントをしなければならない）とプログラムノート
- 理論的分析小論文（調的形式）
- 授業や個人レッスン、指揮、そして初等楽器の演奏のビデオテープ

リサイタルの反省、様々な授業での制作物、学外での活動の証明など、学生の学習プロセスの全てがポートフォリオの内容となっている。学生はこれらを全て提出するのではなく、自分の学習過程の優秀さをアピールできるものを選択して提出する。

この他に第4学年次の教育実習の際には、教育実習生は、次に掲げるINTASC（州間新教師評価支援協会）が定める音楽科教員としての適性証明の基準に基づくポートフォリオを提出せねばならない。

音楽教育適性：INTASC方針

音楽修練のプロセスにおける以下の適性は、将来の音楽教師にとって本質的なものである。卒業に先立って、将来の音楽教師は、

1. 一つの専攻領域において芸術的自己表現に必要なスキルと流暢に楽譜を読む能力と鍵盤楽器・声楽・その他の教育楽器における実用的な能力を示さなくてはならない。
2. 教えるための音楽の聴覚的・言語的・視覚的分析において、音楽の共通の要素と構成的パターンを理解できる能力を示さなくてはならない。
3. 派生的あるいは独創的音楽を、即興あるいは作曲するための能力と、生徒の要求と達成度に合った様々な音楽をアレンジしたり調整したりするための能力を示さなくてはならない。
4. 異なる音楽的スタイルやジャンル、様々な時代の音楽そして多様な文化的資料文献の理解に関連する能力を示さなくてはならない。
5. 正確で音楽的に表現された演奏を創りあげるための、スコアの分析に基づいた効果的なリハーサル能力、分析の統合、スタイル、演奏練習、楽器法、そして指揮のテクニックなどの優れた指揮者としての能力を示さなくてはならない。
6. 音楽教育に対して応用可能な技術的発達に関する全体的で実用的な知識、音楽の領域にどのようにテクノロジーが貢献しているかについての基礎的な理解を示さなくてはならない。
7. 音楽と音楽演奏に関する価値判断を形成し主張するための能力を示さなくてはならない。
8. 音楽的アイデアや概念だけでなく、音楽と他の芸術が人間の精神を高め、文化を経験する独特の方法となり、全ての生徒の教育における統合的な役割を果たす必要があるということについての信念（哲学）について、音楽的に、口頭であるいは記述によって他者とコミュニケーションする能力を示さなくてはならない。

ここには音楽の教師が授業の中で直面する課題が明確に焦点化されている。あらかじめこれらを視点としてポートフォリオを作成するという課題を持って教育実習に臨むことは、限られた期間の中で最大の実習効果を上げる上で非常に有益であると考えられる。わが国の教育実習でも自由な視点からの実習日誌の記述は求められている。しかしイ大のポートフォリオのようにあらかじめ何について考え、記述するべきか、その視点を明確に与えることも考慮する必要があるのではないか。

ポートフォリオの作成を通じて、個々の学生は、4年間の学習過程、あるいは教育実習の課程について反省的に思考することが要求される。このことは学生の多様な学びを音楽教師としての適性という視点で統合させていく上で非常に有効な手段であると考えられる。

6 音楽教師力量観に関する日米学生の比較：アンケート調査をもとに

イ大の音楽科教員養成カリキュラムが、実際に、学生たちの意識や考え方にどのような影響を与えているのかについて検討するために、音楽教師の力量観についてのアンケートを実施し、その結果を日米の学生の間で比較した。

6.1 質問紙の作成

質問紙の冒頭には、次のような指示文を置いた。

「まずあなたにとって理想の音楽の授業を想定してください。その理想の音楽の授業を実現するために、下記に示す教師の能力や行動がどの程度重要であるかについて、『非常に重要である』から『重要ではない』の4段階で、あなたのお考えを示してください⁴⁾」

教師の力量観に関する質問項目は40項目である。この質問項目は次のような資料をもとに作成した。

- 1) 平成11年度の宮崎大学附属中学校教育実習期間中に、指導教員が音楽科教育実習生の授業観察時に授業観察シート⁵⁾に記述した内容のなかから、特に記述の頻度の多い観点。
- 2) 教育実習評価や授業スキルに関する先行研究のなかで行われた調査の項目。

6.2 調査対象者

調査対象となった日本の学生は、宮崎大学教育文化学部特別教科（音楽）教員養成課程及び教育文化学部学校教育課程中学校教育コース芸術・保体系選修に所属する大学生20名である。調査は平成12年9月と平成13年9月の2回に分けて実施された。平成12年の回答者は14名、平成13年の回答者は6名で、調査時点での学年はいずれも3年生である。

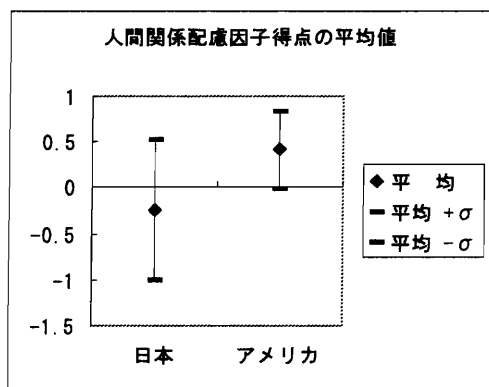
調査対象となった米国の学生は、イ大音楽科で音楽教育を専攻する学生13名である。

6.3 因子得点の推定

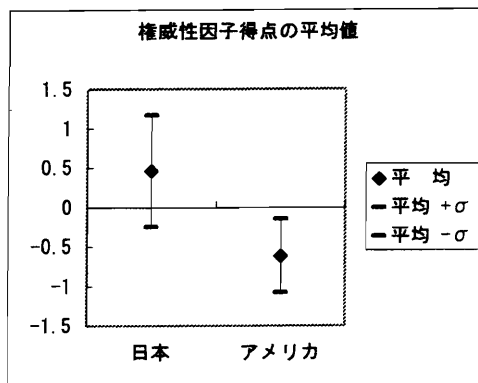
平成13年に実施した「音楽科教育実習生の教師力量観における研究⁶⁾」において、40項目の回答結果から「基礎的授業スキル」「人間関係配慮」「権威性」「心がけ」「主体性支援」の5つの因子を抽出した。このとき算出された因子負荷量をもとに対象となった学生の各因子得点を推定した。

6.4 分散分析

日米の学生の推定された各因子得点について分散分析を行った。その結果、人間関係配慮因子と権威性因子の日米の平均値に有意差が見られた。人間関係配慮因子については、米国の学生の方が有意に高く ($F(1, 29) = 7.40, p < .05$)、権威性因子については日本の学生の方が有意に高かった ($F(1, 29) = 21.34, p < .01$)。すなわち、アメリカの学生は日本の学生に比べ音楽の授業において人間関係を重要視し、生徒に対し教師としての権威や威厳を示すことをあまり重視していないということがいえる。日本の現職教員に対するアンケートでは、現職教員は学生に比べ人間関係配慮因子を非常に重視していること、権威性因子に関しては小学校教員の因子得点が非常に低いことが明らかとなっている。この結果と比較する時、日本の学生よりもアメリカの学生が、より現職教員に近い力量観を持っているということが言える。



グラフ 1



グラフ 2

7 提言：わが国の音楽科教員養成カリキュラムの改革に向けて

イ大における音楽科教員養成に関する分析をもとに、わが国の音楽科教員養成カリキュラム改革のために課題として次の3点を提起したい。

1. 一貫した理念に基づく明確な目標設定とその共通理解をはかること
2. リサイクルを中核とする実践的カリキュラムの開発
3. 学生のリフレクティブな思考の促進

7.1 一貫した理念に基づく明確な目標設定とその共通理解

イ大の学生向けハンドブックでは大学の理念・目標が明確に示されている。これに対し宮崎大学の学生便覧には、大学全体の使命は記述されているものの、学科・コースの理念・目標は明記されていない。

またイ大の場合には、これらの大学・学科の理念やシラバスに記載された教育目標と教員養成に関する社会からの養成（例えばINTASCの基準）が、有機的に連関している。このように全体の目標構造が教員と学生に対して明確に示されていることにより、教えるべきことと学ぶべきことについてお互いに課題を焦点化することができる。

現在日本の国立大学も中期目標の策定のための議論が続けられている。大学の目標が教育改善のために有効に機能するためには、大学内部のみならず、学生や地域からの要請にいかに対応していくかという視点からの議論が不可欠である。大学教員・学生・地域社会の間で、大学や学科・コースの理念・目標についての共通理解が得られれば、カリキュラムの開発・改善に向けた堅密な協調体制が確立できるであろう。

7.2 リサイタルを中核とする実践的カリキュラムの開発

イ大の音楽科ではすべての学生にリサイタルの実施を義務化している。宮崎大学音楽科でも研究室ゼミの単位、あるいは一部の授業のなかで意欲的なリサイタルやコンサートが行われている。しかしすべての学生が毎年定期的にリサイタルに望んでいるわけではない。

音楽科教員をめざす学生にリサイタルの経験を積ませることには2点のメリットがある。

第一に、音楽科教員にとって必要となる基礎的な演奏能力の陶冶に効果があると考えられることである。

わが国の大学では、平成10年の教育職員免許法改正により「教科に関する科目」の必修単位数が大幅に削減された。これに伴い教員養成カリキュラム上では演奏に関する必修単位数が従来と比較して非常に少なくなっている。このため音楽科教員をめざす学生の基礎的な演奏能力の低下が懸念されている。

教員をめざす学生に対し年に1～2回程度のリサイタルを課すことは、単にレッスンのための練習ではなく、聴衆に対する自己表現のための練習を通して、演奏スキルの向上を強く動機づけることになるであろう。また演奏後の聴衆からの反応や自身の振り返りは、その後の課題を明確にする契機となると考えられる。

第2のメリットは、リサイタルの計画・実施のプロセス自体が、やがて教師として直面するであろう教育現場における音楽的実践活動の一つのモデル的经验となるということである。

教育現場では合唱コンクールや文化祭、あるいは卒業式などの式典における演奏発表など、生徒が自分たちの制作する音楽をひとつの社会的実践活動として計画・実施する機会が数多くある。このとき教師は生徒の活動を組織し助言していくリーダーとならなければならない。

リサイタルを実施するためには、会場の確保や案内ポスターやチラシの作成、演奏曲目のプログラムノートを含むパンフレットの作成、タイムテーブルの作成やステージの設営そして会計処理など検討すべき多くの課題がある。仲間とともにこれらの課題を解決していくことは、やがて教師として音楽的実践活動をリードしていく上で貴重な体験となるであろう。

7.3 学生のリフレクティブな思考の促進

イ大では、公立学校における授業観察後の討論やポートフォリオによる評価など、学生に反省的思考を促す手だてが意識的に多用されている。日本の大学でも、授業のなかに討論を取り入れるなどの試みは行われているものの、いまだに教員による講義と筆記試験による評価が中心である。イ大の学生が、日本の学生と比較して、より現場の教員に近い力量観を獲得していたという事実からも、イ大における授業の試みが、学生の教師としての実践的思考能力の開発に一定の成果を上げていると考えられる。

佐藤学は、教授学や心理学の原理や技術の合理的適用に習熟した従来の「技術的熟達者」としての教師像に対し、問題状況に主体的に関与し、省察と熟考により問題を表象し解決策を選択し判断する「反省的实践家」としての教師像を対置し、これが教師の自立性の衰退と学校組織の官僚化を打開する有力なモデルであると述べている⁷。佐藤によれば「反省的实践家」モデルにたつ教師教育の過程は、実践者相互の省察と熟考の相互交流を軸として展開される。つまりイ大の教員養成における反省的思考の促進は、まさに「反省的实践家」モデルにたつ教師教育であるといえる。

教師をめざして学ぶと言うことは、あらかじめ定式化された知識や技能を学んでいくことではない。学生は、学習の過程のなかで常に予測のできない不確かな状況に置かれ、授業や教育実習において直面する新たな問題を、そのつど自分自身の力で定義し、解決のための新たな視点を構築していかなければならない。その意味では、「教師をめざして学ぶこと」あるいは「教師として学ぶこと」は、ショーンの言う「行為のなかの省察」の課程であるといえる。

実際、これからの教師に求められているのは、単なる知識・技術よりも「生涯学び続ける教師としての信念と力量」である。教員養成は、単に必要な知識を授ける場ではなく、自ら問い直し反省する態度と能力を開発する場として位置づけるべきであろう。そのためには現実の出来事のなかから問題を発見し、それについて主体的に解決の方法を考えていくリフレクティブ（反省的）な思考を展開する姿勢を培う必要がある。イ大で実践されている討論中心の授業やポートフォリオは、そのための有力な手がかりとなると考える。

付 記

本報告は、平成14年度宮崎大学学長裁量経費「若手研究者の短期在外研究経費」の支援によるものである。

注及び文献

¹ 教育職員養成審議会第3次答申「養成と採用・研修との連携の円滑化について」

² ただし背景にある問題はわが国とは大きく事情が異なる。アメリカでは現在深刻な音楽科教員不足にあり、音楽科教員養成コースを持つ大学に対し早急の対策が求められているのである。しかし「学生に対し音楽教育者としての使命の重要性を認識させるべきである」「学生参加型の授業を推進する」など、そこで検討されている内容には、教育職員養成審議会の答申と重なる部分も多い。

³ 以下の引用は、すべて、インディアナポリス大学Jo Ann Domb教授氏より提供された資料からのものである。

⁴ 英文での指示は次の通りである。

Please rate the following attitude/actions as a music teacher to offer successful music classes in a classroom situation. Please use the scale from "not important" to "very important".

- ⁵ 菅裕「中学校・大学教員と教育実習生の音楽科授業観察記述内容の比較分析」『宮崎大学教育文化学部紀要 教育科学』第3号（2000年）、107-122頁。
- ⁶ 菅裕「音楽科教育実習生の教師力量観に関する研究」『宮崎大学教育文化学部附属教育実践研究指導センター研究紀要』第9号、2002年、125-138頁。
- ⁷ 佐藤学「教師の省察と見識」『教師というアポリア』所収、世識書房、1997年。
- ⁸ ドナルド・ショーン（佐藤学、秋田喜代美訳）『専門家の知恵』ゆみる出版、2001年。

A Report of Music Teacher Training in a Provincial Private University in USA
— Observations at the University of Indianapolis —

SUGA Hiroshi

I got an opportunity to stay at University of Indianapolis in USA and to investigate into its curriculum of music teacher training between February and March in 2003. The aim of this report is to make a proposal for improvement of curriculum of music teacher training at Japanese university on the investigation. The proposal is as follows: we should

1. establish definite objectives and strive for achieving a consensus for it
2. develop a practical curriculum with recital as its core
3. encourage students think reflectively.